

2013年1月7日

中川 十郎

12月10日、米国家情報会議（National Intelligence Council）が発表した首記報告書の概要をお知らせしたが、その内容の概略と、あわせ、米国の一識者のコメントを紹介し、ご参考に供したい。

この報告は2030年の米国と西側先進国の衰退予想と米国の競争相手となる中国の分析に多大の力点を置いている。その主要論点は以下の通りである。

西側以外の勃興は西側の凋落となるのか。米国主導の自由秩序を保持できるか。グローバルな分岐点からの大きな収斂。それに米国は適応できるのか。西側は落ち込むが退場はしない。西側の没落は誇張されているのではないかなど多くの問題提起をしている。

さらに西側以外の勃興の衝撃は西側世界の終末となるのかなどについても論じている。

国際自由秩序に対する中国の挑戦とインドの魅力。自由主義の光の下での西側の再生。インドは現状の世界秩序の修正を望んでいるが、秩序の放棄はできまい。米国の権力と自由秩序の未来。アンチ 1 極世界の登場。中国の危機。勃興する勢力と新興国の秩序。情報の流入が新興国のグローバル秩序を形成する権力となるか。インド洋地域とポスト・ユニポラー、ポスト西洋秩序形成へのチャレンジ。2030年～米国を中心として再構成されるのか。勃興と没落。自由秩序の弱体化は中国システムが強化されることを意味しない。西洋とその他の世界との戦い。中国とロシア権力主義の腐敗。2030年のアジア安全保障への道。自由秩序と中国民衆。パワーシフト；西側はアジアの世紀に適応し、繁栄できるか。自由秩序の未来と日本の展望。中国とその他の国々の時代における国際秩序。グローバルリーダーシップの不足。なぜ世界は米国を必要としているのか。中国を深く理解すべきだ。新興世界の勃興はバランス・オブ・パワーだけでなく、アイデアのバランスも必要としている。西側とそのほかの国々。中国とインドの勃興に関する好意的情報と批判的情報～日本の観点から。グローバル権力構造と国際自由秩序の未来。中国とロシア民衆の変化と国際自由秩序。国連の安全保障理事会は2030年にどうなるか。

中国の経済成長は失速するか。中国のグローバル経済へのインパクト。中国経済の予測～高度成長か、横ばいか、それとも衰退か。中国と地域主義。中国は中間層の罨を避けられるか。

国際多極システムの下での米国の役割はなにか。米国の衰退は不可避か。米国の中近東における役割。米国を破壊するソフトパワー。

2030年の環境保全に関して、ロボット工学のような先端新技術の進展は雇用の変化をもたらし、下層階級のあらたな失業を招くのか。

未来の移民問題。都市化の挑戦。米国の衰退。高齢化は西側を麻痺させるか。それは中国の発展を阻害するか。

国際システムにおけるブラジルの未来の役割。長期の平和は永続するか。

2030年の気候変動はより極端な気候をもたらすか。

多くの地域の小企業や非国家集団へ先端技術が拡散することにより2030年の環境保全問題はいかなる影響を受けるか。メガシティは革命のつぼとなるかそれとも技術革命のエンジンとなるか。

シェールガスは米国の製造業に二度目の爆発をもたらすかなどを多角的に論じている。

以下、米国の一識者の本報告書に対する含蓄のある素晴らしいコメントを紹介したい。

- 1) もし世界がこの報告書のように単純であるならば、私はこの報告書の評価に同意するだろう。

しかし事実はこの報告書で論じられている以上に悪い状態にある。さらに私を悩ませているのはこれらのことはNIC（国家情報評議会）のレーダーには映っていないということである。この根底には西洋中心、経済中心の盲点があるからだ。

経済さえ成長すれば、世の中はすべてまるく収まるという考えは馬鹿げている。また中間層は幸福な国を意味するという印象も神話に過ぎない。私のこれまでの人生において、私が見てきた ”もつとも” 幸せ”で ”健康” な人間や家族は中間層や上流階級ではないということだ。 ”貧困ライン” の概念はいくつかの国では正確ではない。世界には信じられないほど幸福な ”貧しい” 人々がいる。～もちろんその数は少なくなりつつあるが。

- 2) あなた方は中国やブラジルに行ったことがあるのだろうか。ナイジェリアも “経済ブーム” の国である。もちろんインドも忘れてはならない。経済発展がいかに深刻な事態をもたらしているか。みなさんはそれらの国で見聞し、嗅ぎ、味わい、触れるべきだ。

大いなる神話は “自由資本主義” は世界の “新たな” 救世主だという。だが、資本主義は常に “自由” であった。蒙古、ペルシア、ギリシア、ローマが然りである。税金を徴収し、実際には経済は殺されていたのである。紀元前 300 年インドではギリシア

の貨幣を偽造していた。アレキサンダー時代でさえバクトリアへの貿易とインド・ヘレニズム、ペルシア文化の古い道を活用して貿易で繁栄していた。

紀元 800 年前の鉄器時代からケルト島やゴールから、ローマやペルシア経由中国にむけての活動は“自由市場”資本主義のよき例だ。～そこでは奴隷、スパイス、金その他の交易があり、そこには常に“資本主義”があった。もし自由市場資本主義を見たければ、これまでに数世紀も発展していたナイジェリア、インド、メキシコ、マニラなどを訪問することだ。

- 3) インドの場合、3000 年もの長きにわたり成功し、過去 2500 年間“ブーム”を満喫し、ローマは年間インドに 250 隻もの船を送り、胡椒、シナモン、宝石、金、繊維製品を交易していた。

しかし、インドでは変化が起こっている。3000 年もの農業の成功の後、今日、インドでは除虫薬の過剰使用により腎臓障害で死亡する農民が増えている。その一方で農産物企業は“経済的に繁栄”しているのである。負債を抱え、農地を失い、15000 人もの農民が自殺している現状である。かれらは 3000 年間決して融資を受けたことがなかったのに。さらに世界の食料の 33%を受粉させているミツバチが大量に死亡しているのである。これはミツバチが冬籠りする土地への除虫薬の過度の使用によるもので、毒に浸されているからだ。これを証明するデータがあるにもかかわらず政府や行政は一顧だにしないのである。カエルもまた死に絶えつつある現状だ。

それでもまだ国を発展させることはできるという。企業（実際は株主および経営者だが）は人非人である。ヨーロッパ人は野心的であった。みなそうだ。“発展途上国”はなぜ全面的に野放しの資本主義を認めたのか。過去 3000 年以上もうまくやってきた資本主義をなぜ今やめる必要があるだろうか。

発展途上国では“貧困”は上流の 10%の生活やかれらの“自由”には役立ってきた。（ぜいたく品や召使を使い、安い売春婦を買い～）そして高利益を稼ぎ出し、～～これは米国とて同じである。シカゴ、ボルティモア、デトロイトやデンバー、ニューオリンズの子供たちに仕事を与える代わりに、絢爛たる仮装舞踏会が 30~40 年も続いってきたのである。

そしておびただしい量のトウモロコシが市場を洪水状態にし、多くの工場の仕事が米国に富を拡散していったのである。私はそれは価値あることだったのだろうと推測する。もしくは東アジアのゲーム～マニラの 3Dアーティスト・スタジオがそれらのゲームを提供する。これは“発展”とはなんの関係もない～多分それは“未発達な倫理”

のためであろう。ウガンダのような国では 90 年代に Joseph Cony を止められたかもしれない。しかし南が国をコントロールし、北を不安定にし、そしてジャングルの貧弱な 500~1200 人の義勇兵や子供戦士を制圧する軍隊を所有したのである。同じようにスーダンでも南を不安定にし、無力化することが行われた。そしてそれは成功したのである。民衆を“未開発のままに”しておくことで問題の発生を防いだのである。

- 3) 私の言いたいことは残忍かつ非倫理的な資本主義が徘徊しており、何ら誇りをもたないということだ。倫理的な資本主義（これは経済と経済実践における倫理的な規範を含む）は西側ではすでに失われてしまっている。

この残忍な精神は過去 30 年間米国、英国（それをほとんど捨てていない）それにカナダの寡頭政治の靈性を“残り”の国々にいつも押しつけているのだ。超高度資本主義の高みで倫理的資本主義に敵対しているのだ。この社会的精神寄生状態は盲点を生み出す。インドは今やそのようになりつつあると思われる。パキスタンもしかりだ。たぶん中国もそのように評決される。

- 4) 私は“企業”を非難しているのではない。最高執行役員や最高財務執行役員は、もし、”利益を極大化“するように命じている企業の条項や会社の法令に従わないならば訴訟される以外にないだろう。これらの巨大な機構や仕掛けを計画し、成り行き如何にかかわらず利益を”増大させる“ことを彼らに盲目的に命令するのは株主である。その株主の多くはヘッジファンドであり、ペンションファンドなどなのだ。典型的な大企業の根源的なレベルの実践から”人間的倫理や人間的良心からの分離“が今や非常に具体的、かつほとんど完全に為されているのである。

- 5) 私が大いに尊敬しているテッド・ルーズベルトは警鐘をならそうと努力した。それは 20 世紀のほとんどの西部地方の小規模の経済構造を救ったと私は考える。しかし、大独占体を止めることはできなかった。しかし彼はそれを為そうと努力した勇氣ある偉大な人物であった。カーネギーもよき手本を作りだすことに力を注いだ。そして 1890 年に人間の社会的な寄生生活と経済的な寄生状態に反対する「富の福音書」The Gospel Of Wealth を書いた。しかしそれは今や過去のものになっている。ドワイト D. アイゼンハワーもまた警鐘を鳴らした。

- 6) もしこの報告書がいうように問題点が唯一で単純なものならば、私は少しも悩んだり心配する必要もない。だが最悪の危険はこのレポートに流れている重大な盲点なのだ。

以上

注；この翻訳は中川の責任においてなされたものである。